

～2018信州総文祭に参加して～

本校のボランティア部は8月8日（水）～10日（金）に、長野県駒ケ根市の駒ケ根総合文化センターで行われた第42回全国高等学校総合文化祭のボランティア部門に参加しました。

3日間日程で行われたボランティア部門は「記念講演」「活動報告会」「フィールドワーク及び報告会」の3つが主な活動内容でした。フィールドワークとは、A～Fの6つのコースから1つを選択し、駒ケ根市周辺を移動しながら調査や体験を行うものです。コース毎に「テーマ」と「課題」が設定されており、それに沿って学習した内容を報告会で発表するという活動でした。

以下に、参加した生徒達の感想を載せています。

<大会日程>

1日目	8月8日（水）
12:00～	開会行事
12:30～	記念講演
14:10～	活動報告会
16:10～	フィールドワーク事前学習
2日目	8月9日（木）
08:00～	フィールドワーク
15:00～	フィールドワークまとめ・発表準備
3日目	8月10日（金）
09:30～	フィールドワーク報告会
11:10～	講評
11:40～	閉会行事

● 記念講演「21世紀を生きる君たちへの期待」（長野県松本市長 菅谷 昭）を聞いて

医師であり、松本市の市長を務めて4期目となる菅谷さんは、チェルノブイリ原発事故後の医療支援活動のため、高度に汚染されたベラルーシ共和国で小児甲状腺がんの外科治療に携わった経験を話してくださいました。

当時の日本とベラルーシでは、医療技術に差があったため、日本で手術を受ければきれいに処置できた傷も大きな傷になったことを聞いてとても驚くとともに「平等な環境をつくることの難しさや大切さ」を感じました。また支援活動を通して、自分の選択では出会うことのない人たちと多く出会うことで、相手の立場を考えることの大切さを改めて感じたことを聞いて、私も「人の為に何かをしたい」と思いました。

特に印象に残った言葉は、「自分がこの世の中に生まれたのには意味がある、自分は世の中に必要とされて生まれてきた、という自己肯定感を持ちなさい」、「人の上に立つ人間に成る前に、人を支える人間になりなさい」という2つで、自分ももっと頑張ろうという気持ちになりました。

（2年 橋本さくら）

● 活動報告会（展示発表、ステージ発表）を通して感じたこと

活動報告では、自分達のボランティア活動をまとめたポスターによる展示発表と、ステージ発表がありました。

本校ボランティア部は「No Volunteer, No Life! ボランティアこそ私たちの生きる道」と題して、展示発表とステージ発表の両方を行いました。



「私たちのステージ発表は1番目でとても緊張しましたが、しっかりと丘珠高校のボランティア部について発表できたと思います。他校の発表を聞いて、知らない活動や行ったことがない活動がたくさんあり、自分達の活動を見つめなおすとても良い機会になりました。」

（3年 早坂美紅）

「総文祭を通して学んだこととして、他県の活動はスケールが大きいことがあります。海外ボランティアも多く、学校全体でボランティア活動や講演を行うところも多くありました。また、災害に対する意識の高さも感じました。それは、大災害を経験しているからこそだと思います。北海道だからといって、大震災がないとは限らないので、他校が行っていた震度7等を体験する企画を学校全体でやりたいと思いました。」

（3年 佐藤瑞姫）

「私は、総文祭に参加して、ボランティアは自分から行動しようと思えば、色々なことができるのだと気づかされました。どの学校のポスター・発表もすばらしく、とても勉強になりました。高校生にできるボランティアは限られていると思っていましたが、そんなことはないわかりました。自分達の発表を通して少しでも丘珠地区の良さや北海道の魅力が感じられたら良いなと思います。」

（2年 高木愛由）

● フィールドワーク・報告会に参加して



本校から参加した4名は、Cコースを選択し『国際理解・交流・支援について考えよう!』というテーマのもと、長野県駒ケ根市にあるJICA駒ケ根（青年海外協力隊訓練施設）を訪問し、国際ボランティアの活動や、元青年海外協力隊員の方々の話を聞いて、民族衣装や食文化などを学びました。

「私はニジェールに派遣されていた方の話を聞きました。最初、アフリカは怖いイメージがある国が多かったのですが、全くそんなことはないとわかりました。日本とは違う状況の中で生活していて、無いものはあるもので作ってしまうという賢さや工夫があることもわかりました。日本では起こり得ないようなこともあると聞いて、国によって文化によって「普通」が違うことを改めて感じました。また、発表に向けて自分達で考え計画を立てながら、実際に行動することが大切だと思いました。

(3年 早坂美紅)

「私はミクロネシアに海外派遣されていた方にお話を聞きました。食事は自分達で採った南国のフルーツが中心で、お風呂はなくすぐに断水するので川で水浴びで済ませるなど、生活が大きく違うと思いました。話の中で一番心に残ったのは文化の違いについてです。村の中で母親的な役割のいつも笑顔の女性が倒れて病院に運ばれたとき、その女性の家族が病室の中で亡くなった後について話をしていたそうです。講師の方は不謹慎だと怒ったそうですが、その家族から「おばあちゃんは毎日幸せそうに暮らしてたでしょ？だからもう眠らせてあげよう」と言われたそうです。この話を聞いて、日本人は将来の幸せのために、現在を頑張っているのに対して、ミクロネシアの人は1日1日を幸せに生きているんだと感じました。私も、今この時を大切に楽しむことが大切だと思いました。

(3年 佐藤瑞姫)

3日間の全国大会に4名の部員が参加することができ、大きな刺激を受けてきました。

自分達が学んだことや感じたことを、他の部員たちにフィードバックしながら、これからの活動をさらに充実したものにしていってきたいと思います。

